大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

—雑誌『主婦之友』を手掛かりとして—

佐藤 裕紀子

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

原稿受付平成 15 年 3 月 24 日；原稿受理平成 16 年 3 月 26 日

The Education Consciousness toward the Child and the Living Behavior of the Housewife in the New Middle Class in the Taisho Era

—By the Analysis of the Magazine 'Shufu-no-Tomo'—

Yukiko SATO

Ochanomizu University Graduate School of Humanities and Sciences, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

This paper deals with the housewives in the new middle class of the latter Taisho Era with a view to clarifying relations between the education consciousness toward their children and their living behavior. For this purpose, the women's magazine 'Shufu-no-Tomo' of the time was analyzed. It became clear that housewives' educational concern was directed to discipline, influence of the living environment, study at school, school expenses, and children's will to study. The concern for discipline and environmental influence promoted their active child care while the concern for environmental influence, study at school, school expenses, and children's will to study promoted the housewives' active household work. It may be concluded that the housewives found educational meaning not only in child care but also in household work, eventually forming a pattern of their living behavior that the keener were they on children's education, the more active they became in household work.

(Received March 24, 2003; Accepted in revised form March 26, 2004)

Keywords: new middle class 新中間層, housewife 主婦, living behavior 生活行動, household work 家事労働, education consciousness 教育意識, the Taisho Era 大正期.

1. 緒 言

我が国における主婦の誕生は大正期であるとされる。特に第一次世界大戦後、新中間層の本格的な階層形成に伴い主婦が誕生したというのが今日の定説である。本稿のねらいは大正期の新中間層に形成された生活意識が主婦の生活展開のあり方にどのような影響を及ぼしたのかを探ることにあり、従ってそれは我が国における主婦生活のルーツに迫る試みでもある。

「主婦」には、一家の家事宰領権をもつ「女あるじ」を指す用法もあるが、本稿では、産業革命を契機とする公私の分離及び性別役割分業の固定化とともに誕生した、家庭において上質の労働力を再生産する役割を担う既婚女性を指す用語として用いる。

新中間層とは日露戦争後における日本資本主義の帝

国主義段階への移行期、社会構成の中間部分に新たに登場し、第一次世界大戦後の大正中期以降、本格的に増大し階層形成を始めた社会階層を指す^{*1}。各種統計資料からの推計によれば、新中間層の全人口に占める割合は第一次世界大戦後に4~8%程度を占め、昭和初期にかけての時期に、特に都市部で先駆けて増加したものと把握される(南博社会心理研究所 1965; 門脇 1988)。従って彼らは全人口の1割にも満たない少

*1 新中間層は論者により多様な性格規定がなされてきたが、それらを整理した寺出(1982, 36)の規定に従い、本稿では新中間層の基本的性格を、①労働形態では頭脳労働、②所得形態では俸給、③社会階級上の位置では資本家と賃労働者の中間、④生活水準の位置では中位、という四点とする。

数階層であったことになる。それにも関わらず新中間層に注目する理由は、当時、彼らは文化生活の担い手として、あるいは大衆消費社会における消費リーダーとして、他階層からキャッチアップされるべき目標(寺出 1999, 110)とされ、彼らの生活は人々のモデルとされるとともに(沢山 1995, 150)、彼らの生活様式や生活構造は今日の我々の生活に連なる近代的都市生活の原型(門脇 1988, 214; 寺出 1994, 396)と目される点にある。

しかし新中間層の量的拡大とともに、彼らの内部では二極分解が進行していく。民間企業では経営の近代化のなかで大卒のエリート高級社員と現場の下級社員という区分が、官界では上級官吏の勅任官と下級判任官という区分が存在し^{*2}、下級社員や下級官吏などの低所得層は「洋服細民」、「月給取り」、あるいは弁当を腰に下げて通勤する姿から「腰弁」ともよばれ、半ば揶揄される対象でもあった(横澤 2002, 104)。そして少ない収入にも関わらず、地位相当の生活を維持するための彼らの努力は、新中間層の「生活難」(小路田 1989, 65)を引き起こすことにもなった。

それでは新中間層の主婦の生活はどのようなものであったのだろうか。従来の研究では新中間層世帯の家計支出構造(寺出 1982; 千本 1990)、住生活空間(町田 1986; 西川 1990)、家庭文化(沢山 1995)、家事労働様式(大森 1981; 町田 1984)等が明らかにされてきたが、主婦の生活を生活行動の次元で明らかにした研究は管見の限りではない。そこで本稿は主婦によって語られた生活体験記事をもとに、そこに示された彼女たちの生活意識と生活行動のありようを家族との関係を視野に入れつつ分析することを目指す。既述したように新中間層の生活は我々の生活の淵源であり、上記課題に迫ることは、今日における主婦という存在の意味を考えるうえでも大きな示唆が得られるものと考えられる。

^{*2} 統計から各層の構成割合と俸給格差を確認すると(大原社会問題研究所 1968)、大正12年の総官吏数37万9,370人のうち上級官吏は勅任官1,468人(0.4%)、奏任官3万2,738人(8.6%)、下級官吏は判任官16万7,890人(44.3%)、雇人17万6,874人(46.6%)である。年平均俸給額は文官で勅任官6,386.73円、奏任官2,611.23円、判任官829.99円、雇人489.17円である。つまり上級官吏は総官吏数の9%に過ぎず、残りを構成する下級官吏は新中間層の生活水準を維持できる最低の給与水準にあったといえる。

分析の手掛かりとして、本稿では新中間層の「教育家族」としての性格、即ち、学校教育に強い関心を寄せ、子どもを人並み以上に育てることを家族の主要価値とした点(沢山 1990a, 108)に注目する。彼らの特徴づける、我が子に対する高い教育的関心は、主婦の生活に大きな影響力を及ぼしたと考えられるからである。これまでの研究においては「教育家族」としての新中間層についてどのようなことが明らかにされてきたであろうか。

「教育家族」としての新中間層の性格は、彼らの出自との関係が深い。新中間層は共同体の解体と産業組織および行政機構の複雑化、大規模化が必要に応じて都市に集積させた人口によって構成される(竹村 1980, 45; 中川 1985, 81)。生産手段を私有せず、旧来の農村社会にみられた地縁・血縁関係ももたない彼らは個人的努力、学業、能力によって地位を切り拓かねばならぬ存在であり(沢山 1990a, 109)、学力と学歴をつけていくことが、よりよい生活、子どもの幸福につながると考えたのである(沢山 2000, 119)。また「教育家族」の形成は、学歴社会の成立とパラレルな関係にある。新中間層が階層形成した時期は、求職や初任給に学歴が反映され始め、よい生活が送れるか否かが学歴に規定されることが目に見え始めた時期である(南博社会心理研究所 1965, 193)。家柄・財産をあてに出来ない新中間層は、よりよい生活の保障は学力・学歴にあるとする学歴主義に傾倒していったのである(沢山 2000, 109)。こうした性格をもつ新中間層では、明確な性別役割分業を前提として、母親こそが子どもの意図的な教育の責任を負っているという意識が強くみられる一方で(広田 1999, 54)、父親に期待される子どもへの関与が子育て、教育とはみなされなくなる傾向が進み(沢山 1990b, 139)、家庭という閉ざされた空間のなかで母親自身の自己実現要求を併せ持つ(沢山 1990b, 148)、母親を担い手とした家庭教育が学校教育を強く意識したものとして展開されていった(広田 1999, 55)。だが大正期以降、新中間層の大衆化と学力競争激化のなか、新中間層内部で上昇する層と上昇できない層との上下分解が生ずるに伴い、新中間層の母親たちのなかには学歴主義だけではない新たな意識が芽生え始める。学力競争のなかでは必ずしも我が子が勝者になれないことを意識し始めた母親たちは、一方でよりよい生活を切り拓くための学力の価値を認めながらも、もう一方では子どもの純真さや無垢という教育以前の童心の状態を賛美する

大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

という、学歴主義と童心主義という矛盾した心性を併せ持つようになっていった(沢山 1990a, 125)。

以上が示すとおり、これまでの研究では主に新中間層の母親たちの子育てに対する考え方や関与の仕方と、そこから導き出される教育意識の諸相が明らかにされてきたといえる。そこから浮き彫りにされるのは、閉ざされた家庭のなかで孤立した母親たちが、学校教育に強く依存しつつ、深い愛情と濃厚な我が子意識に支えられ、家庭における教育責任者としての自覚のもとに熱心に我が子の教育に関わる様であった。しかし意識のうえでは我が子の教育に強く規定されつつも、実際の彼女たちの生活行動はさらに多様な展開を見せていたと考えられる。そしてその多様性は子育て・育児に関する資料にではなく、彼女たち自身の生活を綴った資料のなかにこそ見出すことができるのではないかと思われる。

そこで本稿では新中間層の母親(以下では統一して「主婦」を用いる)の生活体験記事を内容分析することにより、子どもの教育に対する関心がどのような生活意識を伴い、どのような生活行動につながっていたのかを検討し、新中間層の教育的関心が主婦の生活展開にどのような関わりをもつものであったのかを明らかにする。但し後に示すとおり、本稿で扱う事例は少数である。そこで特に主婦の教育意識については従来の豊富な研究からの知見を援用しつつ分析することにより、量的限界を補うことにしたい。

2. 方 法

(1) 分析資料と性格

上記課題に迫る資料として、本稿は第一次世界大戦後から大正期末までの期間に刊行された雑誌『主婦之友』(主婦之友社刊)第3巻1号から第10巻12号(大正8~15年)^{*3}における、新中間層の主婦の生活体験記事を用いる。

以下では分析に用いる『主婦之友』の性格について確認しておく。

大正期は女性ジャーナリズムが明治後期以降の女子教育の普及と向上を背景に大きな市場を獲得した時期に相当する。特に相次いで創刊された婦人雑誌のなかにおいて、『主婦之友』(大正6年創刊)は「実用派」雑誌の代表であり、「教養派」を代表する『婦人公論』とともに大正期の婦人雑誌ジャーナリズムの二大潮流

を牽引したといわれる(岡 1981, 106)。

『主婦之友』の発行部数は大正6年の創刊号(3月号)で1万部であったが、大正9年には「当時の雑誌界で第1位の発行部数を確保する」(主婦之友社 1967, 77)までの大衆雑誌へと成長した。大正14年度における全婦人雑誌の新年号の総発行部数が約120万部であったとされるなかにあつて(前田 2001, 217),『主婦之友』の発行部数は大正13年頃には23,4万部を数えたとされるから(講談社社史編集委員会 1959, 609),同誌の発行部数は全婦人雑誌のその2割弱を占めていた計算になる。

当時の膨大な婦人雑誌の発行部数を消化した層は、大正中期以降飛躍的に増加し婦人雑誌を購読できる一定の生活水準と教育水準をクリアした新中間層が中心であったとされる(前田 2001, 225)。『主婦之友』が新中間層の主婦を読者として大量に獲得し得た理由は、同誌の性格が当時の彼女たちの生活から生ずる要求に適合的であったという点にあらう。その要求とは、第一に新中間層は新たに形成されつつあつた階層であり、主婦は夫が稼ぐ俸給という限られた範囲内で生活に必要な全ての物資を商品として購入するという新しい生活様式に対応するための新たな生活技術を必要としていたという点、第二に新中間層の主婦は小規模な核家族の一員であり、彼らは意識の上では故郷の親たちと離れがたく結びついていても日常生活においては実質的に社会的な孤立を余儀なくされており、生活技術の提供者や自らの準拠集団を必要としていたという点である(木村 1992, 246)。

『主婦之友』の編集側が想定した読者層もまた、それまで婦人雑誌市場に登場することの少なかった「中流家庭の主婦」であった。「結婚したら主婦の友」をキャッチフレーズに「家庭を営んでいる婦人」の実生活での要望に応えることのできる内容に焦点をしばって編集された(主婦之友社 1967, 41)。従って内容は「生活に密着した、所帯じみた、ヌカミソクさい」実用性を売り物にし(主婦之友社 1967, 49)、程度は「小学校卒業程度の学力で理解できるほどの、やさしいもの」とすることがモットーとされた(主婦之友社 1967, 51)。

以上から、『主婦之友』は編集側の射程もまた実際の読者層も新中間層の主婦であったと考えることができ、さらに同誌は膨大な発行部数を誇る大衆誌であったことから、当時の新中間層の主婦をめぐる状況を把握するうえで相応しい資料といえる。

*3 但し1923年12月号は欠落のため除く。

(2) 分析記事の選定

分析対象記事は以下の基準に従って選定する。

まず内容の選定基準について、『主婦之友』の記事を内容によって大別すると、①体験談（ふじ子「寡婦の努力によつて築き上げた我が家の歴史」3巻1号など）、②ルポルタージュ（記者「持病を治して十歳も若返つた七十三の老婦人」3巻2号など）、③評論（田川大吉郎「婦人は総選挙を如何に見るか」8巻5号など）、④読者の主張（「結婚に対する処女の要求」4巻1号など）、⑤伝記（緑園生「乃木大将夫人の一生」4巻5号など）、⑥小説（久米正雄「破船」6巻9号など）、⑦娯楽読み物（田中比左良「活動女優訪問記」7巻1号など）、⑧生活技術記事（松田清子「男子用半スーターの編方」8巻1号など）、⑨生活啓蒙記事（竹野芳次郎「赤坊を育てる母親の心得」4巻1号など）、⑩内職案内（本誌記者「有望になつた毛糸編物内職案内」7巻11号など）、⑪家計簿紹介（「俸給生活者の家計実況」6巻3号など）、⑫身の上相談（「夫婦選択の問題に迷へる男女の為の相談会」9巻4号など）、⑬運命判断（船井梅南「婦人の運命判断」3巻1号など）、⑭読者の声（「誌上倶楽部」）、⑮読者の質問（「台所知識相談」など）、に分類できる。

これらのうち、「書き手もしくは語り手が本人の実生活について言及した記事」を基準に記事を選定する。従って上記分類の「①体験談」は全て内容の基準に合致するが、それ以外の記事でも上記基準に合致すれば採用する。

次に記事の書き手・語り手については、その者の階層が新中間層であり、かつ家庭内の地位が主婦であることが明確であることを選定基準とする。「新中間層」を見極める基準としては、記事のなかには生活水準が不明確なものが多いため、夫の職業または所得形態（俸給）を採用する。また「主婦」は前述の用法に沿って「家庭外での職業をもたず、家庭において主として家事労働に従事する有配偶女性」と規定し、これを見極めることとするが、特に夫が家庭の外で働き妻が家庭で家事を担うという近代家族モデルをより忠実に体现した世帯を抽出するため、「夫と離別・死別した女性」、「年金受給者世帯の女性」は除くこととする。

上記手続を経て選定された新中間層主婦の生活体験記事のうち、「主婦の子どもに対する意図的な人間形成の営みおよび意識が描かれた記事」を選定し、これを分析の対象とする。

3. 対象世帯の基本属性

主婦による生活体験記事は全部で62点、そのうち主婦の子どもに対する意図的な人間形成の営みおよび意識が描かれた記事は28点であった（表1）。28点のうち事例2と事例14は同一世帯であったため、以下では対象記事の27世帯について基本属性を示す（表2）。

(1) 世帯類型

世帯類型別にみると夫婦と子ども以外の親族が同居する世帯は6世帯で、それ以外の21世帯はいずれも核家族世帯であった。夫婦と子ども以外の親族が同居する世帯は、弟の同居する事例1の世帯を除いて、いずれも世帯員に親を含んでいた。

(2) 子どもの数

子どもの数が不明である事例15を除く26世帯について、同居の子ども数は6人が最多で2世帯、以下、5人が3世帯、4人が3世帯、3人が10世帯、2人が7世帯、1人が1世帯、子どものない世帯が1世帯であった。

(3) 世帯主職業と生活水準

世帯主の職業別にみると、官吏が8世帯、教員が8世帯、会社員が4世帯、軍人が4世帯、銀行員が1世帯、巡査が1世帯、不明が2世帯であった。

南博社会心理研究所（1965）の算定を参考にすると、新中間層の生活水準を維持できる月収額は大正8年（事例1～7）が40円以上、9年（事例8～14）が55円以上、大正10年以降（事例15～28）が60円以上と考えられる。世帯主収入の記載のある9世帯に限っていえば、事例23と40を除いて新中間層の水準を維持できる最低ラインの収入であったといえる。記載のない世帯の生活水準について正確に把握することは困難であるが、夫の社会的地位から明らかに高い水準を維持していたと考えられる世帯を指摘しておく。官吏世帯のうち事例2=14は局長、事例4は署長、教員世帯のうち事例10、11、12、16は師範学校あるいは大学の教員、会社員世帯の事例9は会社支配人、銀行員世帯の事例13は日銀局長である。これらの世帯はいずれも新中間層の上層に位置するものであり、高収入を得ていたことはほぼ間違いないと考えられる。

4. 分析結果

対象記事28点に示された主婦の主たる教育的関心は二つの領域に向けられていた。ひとつが子どもの生活態度や生活習慣に関する領域、もうひとつが子ども

大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

表1. 分析対象記事

事例番号	巻号 (掲載頁)	記事タイトル (投稿者及び談話者名)
1	3巻3号 (52-54)	地方生活の陸軍中尉の家計 (さだ子)
2	3巻7号 (24-25)	子供を中心に暮す我が家の教育法 (宮内まき子)
3	3巻7号 (30-33)	女中を廃して得た三つの利益 (きみ子)
4	3巻7号 (36-83)	女中を廃して味つた気楽な生活 (ふじ子)
5	3巻8号 (34-38)	酒色に溺れた良人の愛を醒ますまでの一年間の苦しい経験 (まつ子)
6	3巻9号 (16-19)	生活難に泣く中流主婦の悲痛な叫び (某中学教師の妻)
7	3巻12号 (39-41)	物価騰貴に処するための月給生活者の生活改良の実験 (ふえ子)
8	4巻3号 (51-53)	我儘な継子を改心させて一家和楽の基をつくるまでの経験 (雪子)
9	4巻3号 (54-58)	継子五人の教育に成功するまでの十八年間の継母生活 (小枝子)
10	4巻6号 (60-61)	復習も予習も簡単にさせます (乙竹愛子)
11	4巻7号 (60)	家庭に於ける復習のさせ方 (波多野タキ子)
12	4巻8号 (132)	子供の復習は助け導いてみます (寛君代)
13	4巻8号 (133)	子供自身の責任としてさせます (川田楽子)
14	4巻10号 (135)	試験勉強はさせないやうに (宮内萬幾子)
15	5巻1号 (12-16)	勤労の報として劇しい生活難から遁れた実験 (古谷竹子)
16	5巻1号 (131-132)	子供四人を競争の激しい中学に入れた経験 (木村栄子)
17	5巻12号 (62-64)	女中を廃して三年間に千円の貯金 (雪子)
18	6巻3号 (142-143)	年俸二千元の中等教員の家計 (みつぎ)
19	6巻5号 (138-139)	月収六十六円の巡査部長の家計 (ゆかり)
20	6巻7号 (20-24)	双方の幸福の為に別居を望む (嵯峨撫子)
21	6巻14号 (170-173)	収益の多い養蜂に成功した実験 (吉田龍子)
22	7巻5号 (75-79)	子供片手に家政整理の研究 (棟居久子)
23	8巻5号 (32-37)	少ない収入から貯金に成功してゐる我が家の生活法 (矢口菊枝)
24	8巻8号 (94-96)	内職を始めて今では月収百円余 (皆川妙子)
25	9巻8号 (133-136)	先生も見放した不良児を母の愛で感化した涙の経験 (濱浜あい子)
26	10巻2号 (176-177)	物価騰貴と闘ひながら実行した貯金生活の思い出 (村上浪子)
27	10巻2号 (177-179)	長き忍耐と努力とに依つて築き上げた現在の幸福 (立花信子)
28	10巻3号 (168-169)	三人稼ぎで百七拾円の家計 (西川園江)

の学業に関する領域であった。前者を人格形成領域、後者を学力形成領域とよぶこととする。以下では生活体験記事における主婦の言葉を適宜引用しつつ、各領域における主婦の教育的関心が実際の生活のなかでどのような生活意識を伴い、どのような生活行動となって展開されていったのかについて分析した結果を示す(表2)。

(1) 人格形成領域における主婦の行動と意識

人格形成領域に言及した記事は、大きく分類すると、①しつけをする、②生活環境を整える、という内容であった。全10点のうち、前者はわずか2点にすぎず、残り8点は後者に属するものであった。

1) 主婦のしつけ行動と意識

しつけに言及した記事の主婦は、ともに子どもへの関わりにおいてしつけという親子双方に意図された教

育的営為こそが教育の全てであるにとらえるとともに、母親である自分こそがしつけの担い手であるとして他者の関与を排除する点に特徴があった。

事例9は14歳を頭に5人の子どもを持つ会社支配人の夫と再婚した主婦の記事である。この主婦は子どものしつけにおける夫=父親の存在について次のように語っていた。

「父は始終会社へ出勤して家庭には滅多にをりません。それで朝から晩まで子供の様子を見てゐる訳ではありませんから、たとへば会社から戻つて参りました場合に、甲の子供が何だかむづかつてゐるのを見て、面倒だとか又は可哀想だとかの考を持ちまして、これを叱りますと又は何か手許の菓子を与へて慰めるとか往々あることでございますが、これが不可まませんので、父親は今帰つた

表2. 対象世帯の基本属性と主婦の教育的関心

事例番号	対象世帯の基本属性				主婦の教育的関心				
	世帯主職業 (地位など)	世帯主月俸 (一部年俸)	夫婦・子ども以外の世帯員	同居の子ども数 (年齢) など	人格形成領域		学力形成領域		
					A	B	C	D	E
1	軍人 (陸軍)	98 円 50 銭	弟	2 人 (5, 3 歳)					○
2	官吏 (戦時保険局長)			2 人 (学齢期)				○	
3	軍人 (海軍)			3 人 (9, 6, 4 歳)		○			
4	官吏 (官衛署長)			4 人 (9, 7, 5, 3 歳)		○			
5	会社員			2 人 (6, 2 歳)					○
6	教員 (中学校)		母親	4 人		○			
7	軍人 (海軍)	200 円		3 人 (8, 6, 3 歳)		○			
8	官吏		男・姑	1 人 (12 歳)					○
9	会社員 (支配人)			5 人 (14, 12, 9, 6, 4 歳)	○			○	
10	教員 (東京高等師範教授)			3 人 (小6, 小4, 小2)				○	
11	教員 (東京高等師範教授)			3 人 (女学3年, 小3, 小1)		○	○		
12	教員 (帝大教授)			3 人 (中2, 中1, 小4)		○	○		
13	銀行員 (日本銀行国庫局長)			6 人 (大学, 浪人, 中学, 女学, 小学2人)				○	
14	官吏 (戦時保険局長)			2 人 (学齢期)				○	
15	会社員			あり (9 歳の長男他)		○			
16	教員 (前学習院大学教授)			5 人 (中4, 中3, 中2, 中1, 小5)				○	
17	官吏			4 人 (14, 11, 8, 5 歳)		○			
18	教員 (中学校)	年俸 2,000 円 (加俸込み)		5 人 (女学, 中学, 小学2人, 幼児)				○	○
19	巡査	66.34 円 (加俸込み)		2 人 (6, 3 歳)					○
20	不明		姑	3 人 (乳児)	○				
21	教員		途中から実家に同居	なし					○
22	官吏			3 人 (長子3歳他)		○			
23	官吏	55→65→75 円		2 人 (8, 5 歳)					○
24	不明	「100 円たらず」		3 人 (乳児他)					○
25	官吏			2 人 (家事手伝い, 中学)					○
26	教員 (小学校→女学校)	50→60→110 円	実家に同居	3 人 (9, 7 歳他)					○
27	軍人 (陸軍)	85 円		3 人 (→死亡)		○			○
28	会社員	100 円	母親	6 人 (会社員2人, 大学, 女学2人, 他)					○

「世帯主職業」の「不明」は「俸給生活者」または「勤め人」であることを示す。「世帯主月俸」の空欄は、記事に記載のなかったことを示す。「夫婦・子ども以外の親族」の空欄は、夫婦と子どものみの世帯であることを示す。事例2と事例14は同一世帯。表頭のアルファベットは次の内容を示す。A=しつけ、B=生活環境からの感化、C=学業、D=学資、E=怠業からの更正。表中の○は主たる関心の所在を示す。

ばかりで其のむづかつてゐる原因が何であるか…判断がつく訳がないのであります」。

一日の大半を家庭から離れた職場で働く父親は子どもの生活を断片的にしか理解できない。これを理由に主婦は夫=父親を子どもの教育の担い手として不相応な存在として判断し、「夫と協議の上、子女の教育やその他一切如何なる些細な事柄も全く一任して」もらえるよう取り決めを行っていた。

これまでの研究でも、労働条件がもたらす構造的な父親不在の結果として、新中間層の母親たちが「女親こそ親という観念」をもつようになっていったこと(沢山 1990b, 141-142)、さらに理想の教育を実現するため、彼女たちが家庭における母としての地位向上と産育権の確立を課題として意識したことが指摘されている(沢山 1990a, 118)。

上記事例の主婦が家庭における母親としての地位を確保するためにとった行動は、まず「子供全部と召使ひ」を集め、夫の口から夫婦の間で交わした子どもの

教育上の取り決めを話して聞かせることにより周知徹底することであった。さらに具体的な家事の場面では「(下女に対しては)他の用事を命じまして、衣服の裁縫は素より食物の世話、学科の復習、髪の手入から寝起は勿論のこと、入浴や用便の末に至るまで私自身で致しました」と語られているとおり、下女を子どもの世話役割から排除している。

また事例20は姑と同居経験のある、乳児3人をもつ「俸給生活者」世帯の主婦の記事である。この主婦は姑の子どもへの関わり方を次のように批判していた。

「(姑は)子煩悩なので、子供に対しても、たゞ泣かずに機嫌よく遊ばせることに重きをおき、教育上の躰とか、お行儀とかいふ方面のことは『まあまあ子供だから…』といつて見逃すといつた風でございます」。

この主婦が子どもと関わる際に重視していることは「教育上の躰」である。同居の姑も「今時の人は教育があるから、昔の人間の及ぶところでない」と主婦の

大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

教育方針を尊重しつつ、自分の関わりについては子どもの母親とのバランスを考えている。だが主婦にとって姑の子どもへの関与は理想の子育てを阻害するものとし映らず、「我が子の教育さへ自分の思ひの通りにできぬやうな境遇」に「主婦として母として、本当に生き甲斐のない思ひを味」わっている。この主婦が自分の理想を実現するための課題として主張したことは姑との「別居」であった。

当時の農村社会における子どもたちは、地域近隣のなかで、あるいは多世代同居にみられるような親族ネットワークのなかで、多くの大人たちの手によって育てられていた。これに対して新中間層家族は農村共同体の解体のなかから形成された、性別役割分業を構造化した家族であり、そのような物理的要因が結果的に主婦に子どもの世話役割を集中させたことは当然の帰結である。しかし同時に上の事例の主婦には、子どもを「自分の思ひの通り」にできる存在としてとらえる強烈な「我が子意識」と、姑に象徴される共同体の育児文化を否定する形で「母親の産育権の確立」を実現しようとする意識（沢山 1990a, 118）の存在を認めることができ、それが子どもの世話役割を主婦に集中させる結果を導いている様が見出された。

2) 主婦の生活環境整備行動と意識

子どもの生活環境整備に関する 11 点の記事には、二種類の内容がみられた。ひとつは子どもの最も身近な生活環境を構成するものとして、主婦が自覚的に自分の生活管理に努める内容、もうひとつが教育上、子どもの生活環境に相応しくないとされる要因の排除に努める内容で、前者の記事が 8 点、後者の記事が 3 点であった。

i) 自分の生活管理行動と意識

主婦が自分自身の生活管理に励む内容の記事は、いずれもそのことにより子どもの生活環境を教育的に整備することをねらう内容であった。全 8 点のうち 7 点までは、女中を使用しない主婦単独の家事様式を志向し自ら実行するとともに、家事の傍ら修養にも励むという、勤勉かつ規律的な生活に価値をおくものであった。これは当時の新中間層をめぐる生活難、女中難という社会経済的状況を背景にもつものではあるが、生活要求に対し具体的に取り組む過程に子どもに対する教育効果への期待が加わり、主婦の勤勉性が自覚的に維持されるという特徴がみられた。

事例 22 だけは、当時、盛んに喧伝された「文化生活」の理想に経済的負担をかけずに近づこうと試みた

ことを綴った内容であり、家事の手数を省くことに主眼を置くものであるが、自分の子どもとの関わり方を規律化することにより子どもに対する教育効果を期待する点は他の記事と同様であった。

事例 3 は 9 歳を頭に 3 人の子どもを抱えながら、「物価騰貴」による家計圧迫のため、「女中を廃して自ら働くこと」を決意した主婦の記事である。この主婦の生活は次のように描かれていた。

「朝は五時から起きて、炊事から掃除一切をすませ、長男は学校へ次男は幼稚園に、それぞれお弁当を持たして出してやります。其の後は使い歩きから洗濯や縫物とを夕方の四時まで致し、四時から夕飯の支度で、六時に夕食それから後片づけをして八時に子供を寝かすまではそれこそ息をつく間もないやうに働き通します。それでも十時頃になると、一日の疲れで眠くなり、前後も知らずに熟睡いたします」。

ここに描かれるように女中廃止はそれまで女中の行っていた家事を主婦に集中させ、主婦はひとりで一切の家事を行わなければならなくなった。しかし、これが子どもたちに思いがけない教育効果をもたらしたことが次のように語られていた。

「子供等も私が終日休む間もなく働いてると、気の毒に思ふと見え、妹は朝も私と殆んど同時に起きいで、庭の掃除から座敷を掃いたり、自分の物位は洗濯致します。長男はよく使なども致し自分の寝床の上げ下しから三男の守もよく致します。次男は一人で幼稚園に通ふやうになり、三男は兄のゐない間は一人でよく唱歌をうたつて遊びます。又お膳だてなどする時は三人一緒になつて、兄がお膳を出せば二男は茶碗を出し、三男が一つづつ運ぶといふやうに手伝つてくれます。…六時の夕食がすんだ後は、八時の就寝時間まで各自思ひ思ひのことで遊びます。…私が床を敷く間に三人は便所に参ります。…三人とも自分がすんでも他の者がすむまではそこに立つて待つてゐて、三人一緒に座敷に入つて来ます。三人が同時に床に入つて寝ます。かうして自然に自分のことは自分でするといふ自治の精神も養はれ、兄弟も互に助け合ふなど、今までに思ひつゝもなかなか行はれなかつた事も、出来るやうになりました」。

上の言葉から、この主婦は女中を廃止し自ら家事に従事することが、子どもたちの「自治の精神」の涵養と、きょうだい同士で「互に助け合」う習慣の形成を

促したものと認識していることがわかる。この事例以外にも女中廃止により子どもたちの自治の精神が涵養されたことを指摘する内容は事例4, 7, 11, 17に、きょうだいによる助け合いの習慣が形成されたことを指摘する内容は、事例4に見出すことができた。

また事例15は夫の仕事のため子どもとともに渡米し、家族で在米生活をする主婦の記事である。この主婦はアメリカでも日本とは比較にならない生活難が広がっていることを説明し、自分の生活を次のように語っていた。

「火焚きから、冬期用の缶詰や洗濯、裁縫、靴の繕ひまで致さなければならぬうへに、私の道楽として畑に野菜を作りますので、かなり忙しい一日ですが…人も雇はずに、家事万端を私の手で弁じてをります。…一週の仕事は勿論定めてあります。月曜が洗濯と掃除、火曜が火熨斗かけ、水曜、木曜が裁縫、金曜が大掃除、土曜が洗濯とベーキング…をする日となつてをります。夜分はなるべく読書に使ふやうにと心掛けてをります。…写真にある自動車の左に一寸見えるのは車庫ですが、これは組み立て家屋を二百弗で買って来て、私共夫婦して、ペンキも自分で塗つたのです」。

この主婦は生活難のため人を雇う経済的余裕がなく、曜日により予定された家事をひとりでこなすともに、家事の一環として野菜の栽培、車庫の組み立て、ペンキの塗装なども手掛けており、「忙しい一日」を送っていることを強調していた。しかしこの事例でも主婦の忙しい生活が子どもに教育効果をもたらしたことが次のように語られていた。

「私共の働くのを見て、九つになつた長男も、或る日空箱で鳥のお宿を作るといつて、四方を板で打ち付け、一方に小さい穴を明けて、これを葡萄の棚に取り付けました。…子供の教育上には…勤労といふ鋤を以て、自然の恩恵を開拓して行く質実な生活の中に、心身を清く、且つ自由に発達させることの出来るのを嬉しく有難いことに思つてをります」。

この主婦は自分の働く姿を見て子どもたちが「勤労」の習慣を形成していると認識していることがわかる。そして子どもへの自分の感化力に対する自覚が、「夜分はなるべく読書に使ふやうにと心掛け」という行動につながったものと思われる。このように子どもに与える教育効果を意識しつつ家事や修養に励むという主婦の生活展開のあり方は、反対に経済的理由から子

どもを感化するに相応しい生活のあり方を示すことができないことを嘆く、次の主婦の事例にも確認することができた。

事例6は、物価騰貴により「不安と恐怖に日一日と生命を蝕まれながら、蟲のやうに生きて」いる生活実態を告白し、その改善を訴える主婦の記事である。主婦は自分の生活を次のように語っていた。

「最初は女中を廃して家事一切は私の手に引受けることにしました。…遂はれるやうな物価騰貴のためまたまた不如意になつたとき、老人も子供もそれぞれ分担で掃除や炊事を手伝ひ、私は余つた時間で手内職を始めました。…私共は睡眠の時間を減じてまで働いてゐます」。

この主婦が問題としていることは物価騰貴による生活不安自体もさることながら、それが醸し出す家庭の雰囲気や子どもの教育に良からぬ影響をもたらすことへの懸念であった。

「明けても暮れても食べることのためにのみ齷齪とする結果、家庭の品位などといふものは何時のまにやら失はれ…なかにも一番恐ろしいのは子供の変化です。…私共のこの頃は…修養などは愚かなこと、新聞さへゆつくりと読む暇はありません。…家庭をいやしくし、子供等の風儀上に恐ろしい害を来してをります。…学校教育を完全に施したところで、家庭がかういふ状態である以上、決して立派な教育を遂げることはむづかしくございます。…私共の子供は恥も義務も忘れ、自分の利益にのみ走るやうに育てられなければなりません」。

上の言葉からは、この主婦が学校教育を補完するものとして家庭教育の意義を積極的に認め、それを成し遂げるための「家庭の品位」、即ち、親たちが日常的に「修養」したり「新聞」を読んだりすることによって醸し出される、学歴社会を生きる子どもたちが育つに相応しい家庭の文化的雰囲気を保つことに関心を払う様を確認することができた。

ところで上に示した事例3では、女中廃止後の主婦が時間によりスケジュール管理された、極めて規律的かつ勤勉な生活を送っている実態が描かれていた。それ以外でも女中廃止により子どもの自治の精神が涵養されたことを綴った記事には、女中廃止とともに主婦の生活が多忙化した様子が語られていた。実際に女中廃止は主婦の生活を多忙化させたのであろうか。

この時期の新中間層の家庭においては、夫ひとりの

大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

俸給では女中一人を雇用するのが精一杯であり、元来、主婦は女中に家事を一任して自分は監督をしていればよいという立場にいたわけではなかった。しかも女中の仕事は主婦の仕事を手伝うにとどまっておらず、主婦は家事の主たる担い手として働いていたのである（野本 2001, 322）。従って、女中廃止は一方では確かに主婦の家事負担を若干増やすものではあるが、もう一方では家事一切を自分のペースで行うことを可能にするという意味において、主婦にとっては家事をより自己裁量性の強いものとする効果をもったことが考えられる。事例4は、女中廃止が主婦の生活に及ぼす上記二つの効果をよく表していた。

この主婦は女中廃止後の生活について「のんびり」したと表現し、その理由として「いくら年の若い娘でも他人が交つてをりますと、どこやら窮屈でして、ちと横になつて見たいと思つても女中の手前そんな真似も出来ません」と語っていた。それにも関わらず、この主婦は女中廃止後、いかに自分が一生懸命働いているか、その傍らで子どもたちが自主的に家事を手伝い、自分たちの身のまわりを片付け、きょうだい同士が助け合うようになったかを強調していた。のんびりしたことを実感しつつ、子どもの前では努めて勤勉であろうとする主婦の生活展開のあり方は、子どもに対する教育意識が大きく関係していたと考えられるのではないだろうか。

これまでも指摘されてきたように、生産手段を私有せず、頼るべき地縁・血縁関係もたず、自らの力ひとつで生活を切り拓いていかなければならない新中間層にとって、勤勉であることは高い価値をもつものであった（沢山 1990a, 124）。また近代産業社会の形成を急務とする国家が明治以降戦前期まで、小学校教育に採用した思想もまた「勤勉」であった。西本（2001）は、校則、時間割、教科書などの分析を通し、当時の小学校教育がいかに子どもたちに勤勉（時間を浪費しないこと）や規律的態度（時間厳守）を教えたかを明らかにしている。生活体験記事に見られた主婦の行動は、家庭における教育の唯一の担い手を自認する主婦が、勤勉を我が子に身につけさせるべき重要な生活態度として認識し、自分の生活行動に反映させた結果と考えることができる。

ii) 教育阻害要因の排除行動と意識

教育上、子どもの生活環境に不相応であると思われる要因の排除に努める内容は、望ましくない要因から遠ざけるため子どもの行動を制限する、あるいは子ど

もの生活環境からその要因を排除するという二つの行動として展開されていた。

3人の小・中学生を持つ事例12の主婦は、子どもの生活環境に対する配慮を次のように語っていた。

「芝居や活動のやうなものは勿論浅草のやうな雑踏な所は未だ一回も出しません。かういふものは一度その味を覚えると又行きたくなり、それが度重なるに従つて悪感化を受けますから、全く知らせないでおきます。一昨年までは暑中休暇が来ると片瀬に家を仮りて（ママ）家族全体引き移りましたが、此の休暇中に言葉や態度が非常に悪化されるので困りました。それに子供もだんだん大きくなりますから、万一悪い田舎の風習にでも感染して取り返しのつかぬことになつてはと心配して…避暑を止めました」。

また3人の乳児（後に全員病亡）を持つ事例27の主婦は「『居は気を移す』の譬で、愛児の将来のため、目前の家賃のみを標準に、いつまでも裏長屋住ひもできません」と語り、生活物資を節約し貯金に励んでいた。

また14歳を頭に4人の子どもをもつ事例17の主婦は女中を悪感化の源ととらえ、「女中のゐない方が却て子供のためには有益かと存じます」と述べ、女中を廃止するとともに生活を合理化し、家事をひとりで行うようになった経緯を語っていた。

これまでの研究でも新中間層の母親には、純真無垢な我が子を、「俗悪なもの社会」、「民衆の子どもの社会」から守ろうとする意識が働いていたことが指摘されてきた（沢山 1986, 90）。当時、女中は多数が農村出身者であり、教育程度も小学校卒業程度の者が多数を占めていたことから（奥田 1995, 381；野本 2001, 315）、新中間層には女中を「教育上の害」として子どもの教育から排除する傾向があったとされる（沢山 1990a, 126）。主婦の体験記事の「悪感化」という言葉は、衆愚の生活世界からの離脱を目指す新中間層の主婦が、野卑な田舎の風習や下町の風俗、教育程度の低い女中という存在を、子どもの教育環境に不相応なものとしてとらえている様を明らかに示していた。

ところで事例12の主婦は専ら、子どもの行動を制限するという消極的な行動にとどまっていたのに対し、事例27と事例17の主婦は、節約・貯蓄に励む、女中を廃止し自ら家事に励む、などの積極的な行動に及んでいた。いずれも子どもの生活環境に対する教育的配慮から発せられた行動であるが、両者の違いは主とし

て夫の社会的地位にもとづく生活水準の違いによりもたらされたものと思われる。事例12の記事に世帯主収入の記載はないが、夫が「帝大教授法学博士」の肩書きをもっていることから、新中間層としては高い生活水準にあったことが推察される。一方事例27の主婦の夫は陸軍軍人であるが、官位は判任官であり世帯の月収は85円に過ぎない。また事例17の主婦の夫は「某官庁に勤め」る官吏であるが、「学士」であることから官位は高くないと判断される。つまり低所得者層の主婦における子どもの生活環境への教育的配慮は、教育的な環境を獲得するための生活水準の向上を目指し、消費・節約、家事に励むという行動として展開したといえる。

(2) 学力形成領域における主婦の行動と意識

学力形成領域に言及した記事を内容別にみると、①学業をみる、②学資を確保する、③怠業を更正させる、という三種に分類できた。記事の数はそれぞれ9点、11点、2点であった。

1) 主婦の学業関与行動と意識

子どもの学業への関与に言及した記事は、夫の社会的地位や世帯主収入から判断し、いずれも生活水準が中程度以上の世帯であった。そのうち事例9は「学科の復習」、事例18は「子供の予習復習の準備」などの記述があるのみで、主婦の教授行動が行われていることを示唆する内容であった。それ以外の7点の記事には主婦の具体的な学業への関与が描かれていたが、そのタイトルからわかる通り(表1)、いずれもそれ自体を中心テーマに据えた記事であった。しかし、これらの記事は主婦が子どもの学業支援に全精力を傾注している実態を明らかに示しているとともに、その他の記事からは主婦のそのような傾向は見出すことができなかったことから、これらは単に主婦の学業への関与を中心にとりあげた記事であるというよりはむしろ、そこに描かれた生活こそが彼女たちの日常を象徴的に示していると見なすことができる。

これらの記事からは、主婦が子どもの学力形成に関し夫=父親はあてにならない存在であるという認識を持ち、積極的に子どもに関わっている実態が窺われた。

事例12の「帝大教授法学博士」の夫をもつ主婦は「(夫は)何分忙しい身でさうさう相手になることも出来ないと述べ、子どもの学業に対する自分の関わりを次のように語っていた。

「小学校の方は…近所の小学校の先生にお願いして、毎日復習を見てもらつてゐます。次男が一

中の入学試験を受けるについては初めての経験ではあるし、可なり気を揉みましたが、幸に一年半ほど小学校の先生が熱心に復習して下さつたので幸運にも入学が出来たわけでありませぬ。…最も小学校の初年級の折は私が側で見てやりました」。

また「銀行支配人」の夫をもつ主婦、および「前学習院教授」の夫をもつ主婦は「主人も子供の教育は女親がするのが当然のやうに思つて全責任を負はせませぬ」(事例13)、「主人は教育家ですから子供の教育には申分なくやつてゐることと、皆様はお考なさつてゐらつしやるでせうが、事実は全く反対なのであります。他人のお子様は教育しながら自分の子は少しも見ないといふ有様です」(事例16)と述べ、自分の子どもへの関わりを次のように語っていた。

「復習の習慣をつけるために学校から帰つてお八つが済むと見てやりました…国語などでも最初は私が読んで書取をさせ若し文字や仮名遣いの間違があつたときは本に印をして反省するやうに注意してゐました…食後は習字をすることに定めてあります…試験前は気が気ではありません。…世間の皆さんが試験準備といへばもう一生懸命になつてゐますから、やはりするだけの事はしておかねばならぬと思つて、その一学期位は先生に頼んで特に準備させてゐます」。(事例13)

「受持の先生からは頻りに府立の方へと勧められるし、私も将来のことを考へますと矢張り府立に入れておかないと不利益と思ひましたので、色々相談しました結果…主人もこれ位なら受けて見てもよからう、とそこで初めて府立第一中学校に決定して、試験準備にかゝつた位です…出来なければ何処の私立へでも入れる覚悟で、子供にもよくそのことを言ひ聞かせて、試験に対する恐怖や失敗の後の失望の心を起さないやうに注意しておきました。そして試験場では出し急ぎをしないやうに、時間のある限りは二度でも三度でも繰り返してやり直すやうに始終言ひ含めました」。(事例16)

また「戦時保険局長」の夫をもつ主婦は、夫の子どもへの関わりについて次のように語っていた。

「月曜日に試験があると分つてゐても日曜には父が連れ出して海岸やら其の他へまゐります」(事例14=2)、「宅はお勤めがありますから、朝夕とか日曜や祭日などでなければ、子供のお友達にはなれませぬが、もう家にゐさへすれば屹度子

大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動

供のお友達になりきつてみます」。(事例 2=14)

これまでの研究でも、産育権の所有者が父から母へと交代する過程においては、近代的な教育概念の登場とともに、父親の子どもを育み太らす子育て行為が教育とみなされなくなっていったことが指摘されている(沢山 1990b, 138-139)。上の事例でも主婦は夫=父親の子どもへの関わりを「お友達」と位置づけ、これと対照的に自分の子どもへの関わりがいかに教育的なものであるかを次のように強調していた。

「私は随分学校へ出掛けました。そのお蔭ですこはあのやうにすればよいとかこれはこのやうに教へるとよく分かりますといふ呼吸が分りますので、家でもその通りやつて見ると大そううまく行きます」。(事例 14)

この主婦たちが行っていた行動は、直接的な学業指導にとどまるものではなかった。子どもの学業支援のため、それを中心として生活全体を管理する行動にも及んでいた。

ともに「東京高等師範教授」の夫をもつ主婦はその実態を次のように語っていた。

「学校のこと、といへば何をおいても先づその方をするにしております。そして土曜日はお休みにして、日曜日の朝復習して後は遊ばせることにしておりますが、日曜日にあまり遊ばせすぎると、疲れて月曜日のお稽古に影響しますから、疲れないうちに遊ばせておきます。月に一回位は植物園などに遊びに行きますが、午後になれば、必ず帰ることにしております」。(事例 10)

「小学校の方にはまだ自発的に勉強するだけの年にもなつてゐませんから…毎朝食後必ず算術の問題を五題出してさせます。…それが出来ますと時間の多少に拘らず庭に出て、友達の来るまで遊ばせます。そのうちに友達が揃ふと、七人連れて学校へまゐります。電車には決して乗せません。…帰宅後は読方や書方など二三十分間復習させまして、七時にはもう寝させることに定めてあります。長女の方は十時と決めてゐます」。(事例 11)

以上の通り、生活水準の高い世帯においては、新中間層が直面した構造的な父親不在(沢山 1990b, 141-142)のもとで、主婦が家庭における子どもの教育責任者としての自覚を強め、予習・復習から受験指導、学校参観にいたるまで積極的に関与するとともに、子どもの生活全体を管理するという、学校教育に強く規定された主婦の生活展開のあり方を見出すことができた。

2) 主婦の学資確保行動と意識

主婦の学資確保行動への言及のあった記事には、生活水準の高い世帯の事例は一つも含まれていなかった。全 10 点のうち事例 5 は夫の放蕩を克服した体験談であり、子どもの教育については「子供の教育費にと、月々貯金」していることへの言及があるのみで、具体的な意識や行動についての言及はなかった。そこでこれを除く 9 点の記事について内容を検討したところ、いずれも子どもの学業成就への願望が強く表明されており、そのための学資の必要が主婦に貧困を意識させ、学資確保につながる二種類の行動を促していた。ひとつは内職に従事し、家庭にしながら収入増加をはかる行動、もうひとつは生活物資の節約や生活物資やサービスの自給化により消費抑制をはかる行動であった。

i) 収入増加行動と意識

4 点の記事に示された主婦の内職行動は、「教育貯金」(事例 23)の言葉に示されるように、いずれも子どもの成長に伴い将来的に発生するであろう学資の必要に備えることを目的とする行動であった。しかしその必要額に対する認識は、「(子どもの)進みたいといふ道」に進ませてあげることができる程度(事例 18)、「予想のつくまで」(事例 21)、「不時に備ふるやうに」(事例 23)などの言葉が示すように、漠然としたものであった。決して余裕があるとはいえない経済状況と、物価変動に関わらず夫一人の俸給で生活費の全てを賄わなければならないという生活不安のなかで、それでも何とか子どもには満足な教育を授けたいという漠然とした願望が、主婦により一層の経済的不安を意識させ、内職行動を促している様が確認できた。

事例 18 の主婦は子どもの進学希望を叶えたいと願う心情を次のように語っていた。

「折角体格も頭脳も優れてゐる子供に、進みたいといふ道に進ませることができない原因が、金が不足だからといふのでは、いかにも残念なことだと、明けても暮れても胸一杯でございました」。この主婦が考えた方策は、次のような過程を経て内職に従事することであった。

「百の思案も一の断行に及ばぬと思つた私は、昨年早々から実行ができるやうにと、殆ど不眠不休で計画に取りかかりました。…私の労力を金銭にかへることができるやうに、『私の時間』を得ようとする計画でございます。…まだ売るには惜しいものも、和服といふ和服は、浴衣二三枚づゝのほか全部売り払つてしまひました。…衣類の整

理と同時に、子供一人に一個づつ普通の大きさの箆笥を作らせました。…それと、ともに、縁側全部に蓆を敷きまして、一週一回の大掃除の外は、雑巾を朝夕にかけなければならない手数を省きました。…それ等の改革から得る時間を、四時間と計上しまして、その標準で午後三時間、午前一時間を私の勤労時間と定めて、ミシンの刺繍をしてをります」。

主婦が内職を始めたところで、夫婦と子どもだけの世帯で家事を代替するものはない。学資補助のための新たな労働の必要が、家事の合理化を促している様を確認することができた。

ii) 消費抑制行動と意識

消費抑制に励み学資の確保に努めていることが記された記事のうち、節約にのみ励んでいた事例が4点、節約とともに生活物資の自給化を行っていた事例が1点であった。主婦の節約行動が記された4点のうち、唯一学齢期の子どもをもつ事例57では、現在、大学と女学校に通う三人の子どもをもつものの、夫以外に娘二人が会社員として働いているため、三人合わせた世帯収入として百七拾円を得ており、夫婦二人と六人の子ども、母親という九人の「大家族を切り廻す」ため節約に励んでいることが記されていた。それ以外は学齢に達していない子どもをもつ世帯の事例で(事例1, 19, 27)、「まだ学校へ出ませんので、どの位費用のかゝるものか見当がつかません」(事例19)との言葉が示すように、学資の必要に対する実感の曖昧さが、主婦に最も手近な消費抑制行動である節約行動を促したものと思われた。

5歳と3歳の子どもをもつ事例1の主婦は「子供にだけは一通りの教育を授けたい」との理由から、節約に励む様を次のように記していた。

「炭は九月頃の安価の時に冬分をも買ひ込みましたので毎月それを貯金通帳へ返金してゐます。…また風呂焚き用として、コークスをませて用ひます。粉炭まで棄てないやうに注意してゐましても、これ以上節約は許されません。…公務用被服は、朝鮮時代に作ったのを間に合はせて、いろいろ修繕にのみ費してをります」。

また9歳を長子とする三人の子どもをもつ事例26の主婦は「(子どもに)学資に不自由なく勉強させてやりたい」との理由から、「動員令でも出たかのやうな気持で」節約に励む傍ら、家事の一環として「実家の山で薪を伐つてきたり、畑に野菜を栽培したり、鰯

の粉を煮出汁に」するなど物資を自給化して学資の確保に励んでいた。

以上に示した二種の学資確保行動は、いずれも主婦の生活の多忙化をもたらすものである。内職は家事と仕事という二重労働をもたらし、生活物資の節約・自給化は家事の拡大に連動する。しかし同時にそれらは子どもの将来のよりよい生活を保障する学力形成につながる行動でもある。従って主婦は内職や家事に教育的意味を見出し、ますます精力を傾けていったものと思われた。

3) 子どもの更正をめぐる主婦の行動と意識

問題を抱える子どもに関する二点の記事は、ともに中学生の子どもを更正させた主婦の体験談であった。両者とも子どもの生活態度の悪化を問題にするものであるが、主婦の問題意識は子どもが進学を意識する学齢にあるため、生活態度の悪化は学業成績にも直結し、子どもの将来にも悪影響を及ぼすこととなる点にあった。

それは事例25の主婦が「カフェー」や「活動」に通い始めた子どもを前に、諭して聞かせた次の言葉に明らかに示されていた。

「そんなにしてゐたら、学校も続けられなくなるし、従つて上の学校にも行かれなくなる。さうすれば生涯、人の下積みで暮らさなければならぬ」。

言葉で諫めても聞き分けのない子どもに、この主婦がとった行動は子どもを「愛し尽す」ことであった。具体的には子どもの望む着物を拵えてやること、食膳に好物をそろえてやること、縫い物の内職で収入を得て物質的に不自由させないこと、などである。そしてその愛情が子どもに伝わり苦労が実を結んだことは、「月日は流れて、今は彼は某大学の高等学院に通学」しているという、学業面での成果として語られていた。

また事例8の主婦も我儘な子どもの生活態度を改めるため、夫の病気による離職とともに、女中を廃止し自ら家事に従事していたところ、その「誠意あるところ」を子どもが理解し、その後「医専を卒業」し今では病院を開業するまでになったと語っていた。

以上の二つの記事に示されるとおり、主婦は子どもの将来に学力が決定的に重要となることを強く意識している。我が身の振る舞いを通し、怠業に傾きかけた我が子の学業意欲を再び喚起しようとする意識が、家事や内職に励むという主婦の行動を促している様を確認することができた。

4. 考 察

以上の結果から、子どもの教育をめぐる関心が主婦の生活展開のあり方とどのように関わったのかを考察する。

子どものしつけ、生活環境からの感化、学業、学資、怠業からの更正、という五つの方向に向けられた主婦の教育的関心は、それぞれ特徴的な意識を伴いながら、主婦の生活行動を大きく二つの方向に導いたといえる。ひとつが主婦の生活を子どもの世話役割中心のものへと導く方向、もうひとつが主婦の積極的な家事労働を促す方向である。

厳格になされた自分のしつけこそが我が子にとっての真の教育であるという認識、教育的に整備された生活環境に我が子を隔離したいとする欲求、家庭における我が子の教育責任者としての自覚、これらはいずれも主婦の生活を子どもの世話役割中心のものへと導いていた。また自分の勤勉・規律的な生活態度に我が子が感化されることへの期待、教育的な生活環境を我が子に提供したいとする欲求、生活不安のもとでの我が子の学業成就への願望、自分の働く姿によって怠業する我が子の学習意欲が喚起されることへの期待、これらは一方では消費支出の抑制を目的として、もう一方では家事労働に励むという行為自体を目的として、いずれも主婦の積極的な家事労働を促していた。

そしてここで注目されるのは、一部の高所得層を除く一般の主婦は、その高い教育的関心を直接的な子どもへの関与ではなく、家事労働に反映させていた点である。新中間層ではあっても上層ではない、むしろ「腰弁」と揶揄される対象となったであろう多くの新中間層の主婦は、生活不安のなかで子どもの教育に対する必要を意識すればするほど、そのための費用の必要や子どもにとって最も身近な我が身のあり方を強く意識することとなり、家事労働に精力を傾けることになったといえる。換言すれば、子どもとの関係において多くの主婦は自分の家事労働に教育的意義を見出しており、教育的に意義づけられた家事労働は、教育熱心であろうとする主婦によって一層、促進されることになったといえるだろう。

ところで本稿の分析で明らかになった主婦の生活展開のあり方は、どのように形成されたものであったのであろうか。中流家庭の婦女子の養成を目指して組織された教育機関が高等女学校であったことを想起するならば、そこでの教育内容に要因の一端を探ることができるであろう。

当時、高等女学校で使用されていた家事科教科書の「育児」「家庭教育」に関する内容をみると、学業面について学校との連携を怠らず学校参観も積極的に取り組むこと（三輪田と児崎 1904, 74；佐々木 1906, 29 など）が説かれるとともに、子どもの生活環境への配慮については、安易に育児を子守りや乳母に任せないこと（甫守 1908, 123-124, 1911, 116-117 など）、子どもの友人の選択に留意すべきこと（村田と喜多 1902, 90；教育学術研究会 1908, 80 など）、徳性の涵養については母親が率先して勤勉を示し子どもの模範たるべきこと（星と中島 1902, 70-71；戸野 1907, 60-63 など）、などが強調されている。これらは本稿でみてきた主婦の生活展開のあり方と見事な整合性を示しており、彼女たちが高等女学校の教育にいかに忠実に従ったかが理解される。産業構造の転換のなかで新たに誕生した新中間層の主婦は、農村社会の共同体規制から解放されているという意味において極めて自由な生活を享受できる立場にあったが、そのことは同時に倣うべき生活の範を持たないことをも意味したから、彼女たちが学校での教育に依存していったのは当然の帰結であったかもしれない。

5. まとめと要約

本稿は、第一次世界大戦後から大正期末までの期間に刊行された雑誌『主婦之友』第3巻1号から第10巻12号（大正8～15年）における、新中間層主婦の生活体験記事を用い、子どもに向けられた主婦の教育的関心はどのような生活行動として展開したのか、そして主婦の生活展開のあり方とどのように関わったのかを分析した。その結果、以下の知見が得られた。

- ① 主婦は自分のしつけこそが我が子にとって望ましい教育であると認識し、子どもの世話役割から他者を排除する傾向がみられた。
- ② 主婦は生活環境を教育的に整備することにより子どもが感化されることを期待し、一方では勤勉かつ規律的な家事行動を行い、もう一方では子どもを教育的な生活環境に囲い込み、あるいはそのための生活水準の向上を目指して節約に励む、などの行動をとる傾向がみられた。
- ③ 主婦は自分が家庭における子どもの教育責任者であることを自覚しており、予習・復習をみる、受験指導をする、学校参観をする、生活管理をするなど積極的に学業に関与する傾向がみられた。
- ④ 主婦はたとえ経済的に困難であっても、是非と

も子どもには教育を授けたいと願っており、節約に励む、家事の傍ら内職をする、などの行動をとる傾向がみられた。

⑤ 主婦は怠業する我が子が学業成就できることを願っており、学習意欲を喚起するため、家事労働や内職に励む傾向がみられた。

⑥ 以上から、主婦の教育的関心は、大きく分けて主婦の生活を子ども中心のものとする、積極的な家事労働を促すという二つの方向に導く役割を果たしていたといえる。しかし両者の違いは主として生活水準の違いに由来するものであり、当時の新中間層の多数を構成した低所得世帯では、教育的関心は主婦の家事労働を促す方向に機能したものと考えられる。

本稿では新中間層の教育的関心と主婦の生活行動との関連を分析することにより、高い教育的関心が積極的な子どもへの関与を導くというだけでなく、積極的な家事労働を促すという、新たな生活展開の回路を見出すことができた。またその分析を通じ、子どもとの関係における主婦の家事労働の主観的意味づけにも迫ることができた。しかし教育的関心が描かれていない体験談も多かったことから、主婦の生活を規定した要因は他にも多いことが予想される。また夫との関係における主婦の家事労働の意味づけも解明されていない。これらを明らかにすることにより、新中間層主婦の生活実態にさらに深く迫ることが今後の課題である。

引用文献

- 千本暁子 (1990) 日本における性別役割分業の形成—一家計調査を通して—、『制度としての〈女〉—性・産・家族の比較社会史』, 平凡社, 東京, 187-228
- 広田照幸 (1999) 『日本人のしつけは衰退したか』, 講談社, 東京, 49-74
- 甫守ふみ (1908) 『実用家事教科書』, 東京晩成處, 東京, 123-124
- 甫守ふみ (1911) 『新編家事教科書』, 東京晩成處, 東京, 116-117
- 星 常子, 中島与志子 (1902) 『家事教程』, 東京六盟館, 東京, 70-71
- 門脇厚司 (1988) 新中間層の量的変遷, 『生活水準の歴史的分析』, 213-249
- 木村涼子 (1992) 婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立—近代日本における主婦役割の形成との関連で—, 思想, **812**, 231-252
- 講談社社史編集委員会 (編) (1959) 『講談社の歩んだ五十年』, 講談社, 東京, 609
- 小路田泰直 (1989) 帝国主義的都市の成立と生活難問題, 部落問題研究, **98**, 61-92
- 教育学術研究会 (1908) 『高等女学家事教科書』, 同文館, 東京, 80
- 町田玲子 (1984) 家事労働をどう改善してきたか, 『いま家事労働に問われるもの』, 有斐閣, 東京, 140-165
- 町田玲子 (1986) 都市住宅における家事労働の住空間的条件の変遷, 日本建築学会計画系論文報告集, **363**, 168-176
- 前田 愛 (2001) 『近代読者の成立』, 岩波書店, 東京, 216-225
- 南博社会心理研究所 (1965) 『大正文化 1905-1927』, 勁草書房, 東京, 183-195
- 三輪田真佐子, 兒崎隆子 (1904) 『新選家事教科書』, 寶文館, 東京, 74
- 村田 脩, 喜多仁史 (1902) 『家政教本』, 普及舎, 東京, 90
- 中川 清 (1985) 『日本の都市下層』, 勁草書房, 東京, 81-96
- 西川祐子 (1990) 住まいの変遷と「家庭」の成立, 『日本女性生活史』第4巻, 東京大学出版会, 東京, 37-41
- 西本郁子 (2001) 子供に時間厳守を教える—小学校の内と外, 『遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成—』, 三元社, 東京, 157-187
- 野本京子 (2001) 家事労働をめぐる「主婦」と「女中」, 『女の社会史 17-20世紀—「家」とジェンダーを考える』, 山川出版, 東京, 311-332
- 大原社会問題研究所 (1968) 『日本労働年鑑 第6巻』, 法政大学出版会, 東京, 141
- 岡 満男 (1981) 『婦人雑誌ジャーナリズム』, 現代ジャーナリズム研究会, 東京, 87-106
- 奥田暁子 (1995) 女中の歴史, 『女と男の時空—日本女性史再考V 闘ぎ合う女と男』, 藤原書店, 東京, 376-410
- 大森和子 (1981) 家事労働に関する調査研究, 『家事労働』, 光生館, 東京, 234-274
- 佐々木君代 (1906) 『最新家事撮要』, 大日本図書, 東京, 29
- 沢山美果子 (1986) 近代日本の家族と子育ての思想 (その1)—新中間層における教育家族の誕生と〈童心〉主義子ども観—, 順正短期大学研究紀要, **15**, 81-92
- 沢山美果子 (1990a) 教育家族の誕生, 『〈教育〉—誕生と終焉』, 藤原書店, 東京, 108-131
- 沢山美果子 (1990b) 子育てにおける男と女, 『日本女性生活史』第4巻, 東京大学出版会, 東京, 125-162
- 沢山美果子 (1995) 主婦と家庭文化, 順正短期大学研究紀要, **24**, 147-159
- 沢山美果子 (2000) 『男と女の過去と未来』, 世界思想社, 京都, 108-131
- 主婦の友社 (編) (1967) 『主婦の友社の五十年 (明治・大正編)』, 主婦の友社, 東京
- 竹村民郎 (1980) 『大正文化』, 講談社, 東京
- 寺出浩司 (1982) 大正期における職員層生活の展開, 『生活学 第七冊』, ドメス出版, 東京, 34-74
- 寺出浩司 (1994) 新中間層, 『大衆文化事典』, 弘文社, 東京, 396
- 寺出浩司 (1999) 新中間層, 『生活学事典』, ティビーエス・ブリタニカ, 東京, 110-111
- 戸野みちゑ (1907) 『最新家事教科書』, 寶文館, 東京, 60-63
- 横澤清子 (2002) サラリーマン層の増加, 『史料が語る大正の東京100話』, つくばね舎, 東京, 103-107